Ⅰ 序 章

調査の経過と概要

伝統ある白藤学園が1983年10月に創立90周年を迎えるにあたり、その記念事業の一つとして、既存校舎のうち講堂をはじめいくつかの建物を除去し、鉄筋６階建の新校舎を建設することになった。そこで学園は、奈良県教育委員会と善後策につき協議を進め、工事に伴う発掘届を提出した。当地付近は、1979年に奈良市此瀬町の茶畑から発見された太安萬侶墓の墓誌に記されている平城京左京四条四坊にあたり、同氏の居住地でもあることから、県教育委員会は当該地の発掘調査の必要性を痛感し、奈良国立文化財研究所との間で、調査をする方法に種々検討を加えた。その結果、1982年６月中旬すぎから発掘調査を開始することとし、調査費用は学園側が負担することとなった。

白藤学園は1928年９月に現在地である奈良市三条宮前町３丁目６番地に位置するようになり、いまでは10,005㎡の敷地を占めている。国鉄奈良駅の西方約400ｍにあり、1890年代に開通した鉄道線の西側一帯は、当時はまだ民家のまったくない田園であった。1955年撮影の航空写真（PL.２）をみても、奈良駅西側にはまだ水田が多く、現在のような過密な状態は想像もつかない。

調査地は、平城京の左京四条四坊九坪にあたり、校地の北側には三条大路が通り、校地

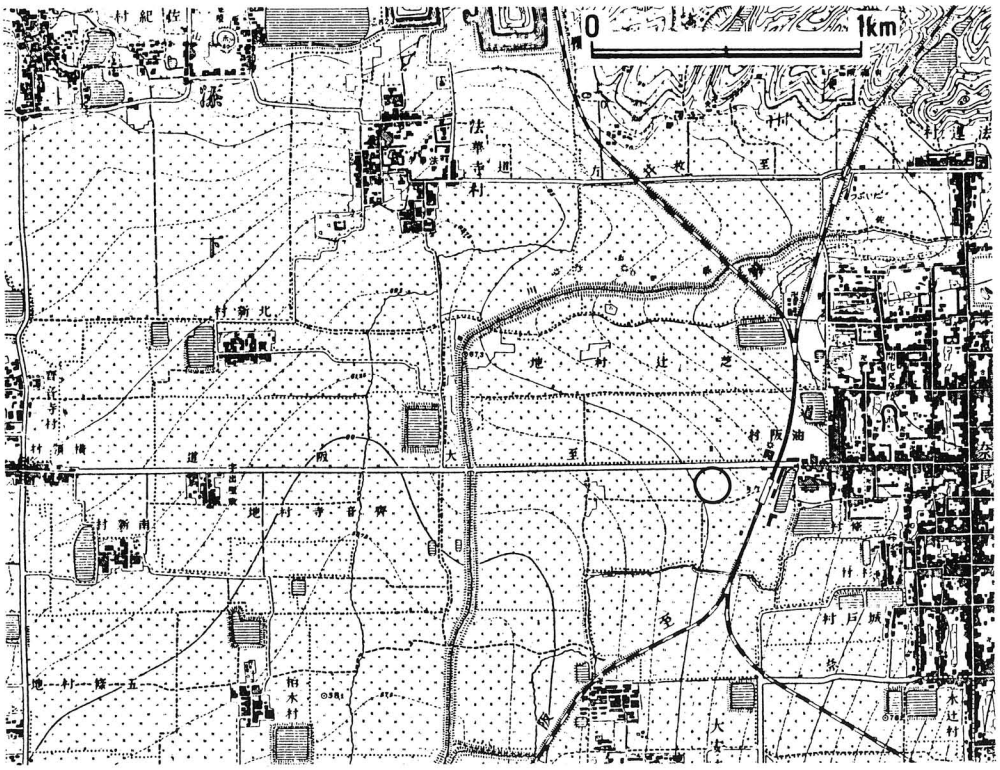

fig.２　調査地周辺図（明治20年測量 同31年修正・発行）

◀fig.１　調査地位置図（奈良市作成「平城京条坊復原図」による）

中ほどを東四坊の坊間路が南北に通る。新築予定の校舎は敷地の東半部を占め、発掘調査はこの建設用地のうち計620㎡にわたって行なった。調査地は、学校用地として土盛りをされているため、調査員立ち会いのうえ、重機を使用して旧耕作土下の床土の一部まで排土した。人力による発掘調査は、6月28日から開始し、遺構検出ののち写真撮影、遺構実測と進め、7月10日をもって終了した。埋め戻しは再び重機により翌日行なった。

発掘調査にあたっては、当研究所で行なっている京内条坊にもとづいた地区割にしたがって、6ＡＦＫ－Ｈ地区と定めた。さらに国土方眼座標（第6座標系）の基準点（Ｘ＝－146,589.0、Ｙ＝－16,690.0）をHN83として、3ｍ方眼の小地区を設定したうえ、発掘遺構の記録や遺物取り上げの地区名とした。調査は新校舎予定地の東半部、すなわち坊内九坪に中心をおき、校地中央部に予想される坊間路の検出をもねらい西方に発掘区を延ばして逆Ｌ字形に約400㎡を当初発掘した。その後、遺構検出の進行にともない、東部・北部・西部などの一部を若干拡張したため、発掘面積は合計620㎡となった。

調査地は以前には水田であったため、その後の校地造成時の盛土が全体にわたって約25㎝ある。旧水田の耕土下には床土層が約25㎝あり、その下に奈良時代の遺物を包含する厚さ約10㎝の灰褐色土があり、その下部が遺構面となる。発掘区の各所には校舎建設時の撹乱がおよんでおり、特に発掘区の西側では旧校舎の基礎が遺構面深くにまで達していた。しかしながら全体として遺構の保存状態は良く、多数の遺構を検出することができた。今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物8棟、塀5条、土壙9基、坊間路路面とその東西両側溝などで、これらはすべて奈良時代に属するものである。

fig.3　遺跡を見学する生徒たち

fig.4　発掘調査風景